

イスラームの文化はたえず書物を生み出す文化であり、一定の評価を得る書物が現われるとそれに注釈が書かれ、さらにその注釈に注釈が加えられるという形で伝えられて行く。ここで紹介する写本はイスラームにおけるアリストテレス哲学の入門書として、すなわち、マドラサ(学校)の教科書として、ひろく利用されたアブハリー Athir al-Dīn Mufaḍḍal al-Abharī (663AH / 1265CE没)の『哲学入門』*Hidāyat al-Ḥikmah*の一注釈書である。左掲の写真はマウラーナーザーデ Mawlānāzādah (西暦15世紀初頭以前の人物)による『哲学入門注釈』*Sharḥ Hidāyat al-Ḥikmah*で、1987年度に東京大学東洋文化研究所が購入した写本の一つ(Daiber Collection I, No. 23)である。明記されてはいないが、18あるいは19世紀に書写されたものと思われる。向かって右側の第15葉裏の2行目から自然学の論述のなか「運動と静止について」という節が始まる。

最初に出ている運動の定義は前代の哲学者たち(欄外への書き込みはプラトンとする)の見解であり、第一の師匠(al-muʿallim al-awwalアリストテレスであると行間の注は記す)はこれを批判し、時間とは運動の量であるという定義から、時間、すなわち運動、の観念を内に含む「段階的に」という概念で説明される運動の定義は循環論法であるという。そして後代のある哲学者はそれを避けるために、「段階的に」とは直観的に表象されるものであり、時間とは関係しないと答えたという。この哲学者は「先師プラトン」(al-imām Aflāṭūn)であると欄外には書いてあるように見えるが、この文脈には合わず、17世紀のモラー・サドラーの注釈ではペルシャのプラトン主義者ともいわれるスフラワルディーの見解としており、「プラトン学派の先師」(al-imām al-aflāṭūnī?)とあるべき所を居眠りしをていた学生がよく分からずに先師プラトンと書いてしまったのかもしれない。いずれにしても行間や欄外にさまざまな方向で書き加えられた注記や訂正を解説して行くと、昔の学者がどのようにこの書を読んでいったのかが、すこしづつ分かるような気がしてくる。以下に第15葉裏2行目から第16葉表2行目までの本文部分の訳文を付す。

(翻訳)

[著者]いわく。運動と静止についての節。私[注釈者]いわく。運動は自然的物体であるかぎりでの自然的物体に生じる諸状態のひとつであり、欠如と所有とが相対しているように、それは静止に対立している。そこで本節で彼はその両者の考察を意図した。その両者の考察は両者の本質の表象に基づくので、最初に彼は両者を定義した。欠如態のものは所有態のものによって定義される故、定義において欠如である静止にとってそれは所有であるので、運動を先に置いた。

そこで彼は、それ[運動]は潜勢態から現勢態へ段階的に出ていくことであると定義した。その説明は以下のように。すなわち、存在しているものはいかなる面においても潜勢的ではあり得ない。さもなくば[もし潜勢的であるならば]、その存在は潜勢的であり、それゆえそれは存在しているものではあり得ない。我々はそれが存在していると想定すると、[以下のようなふたつの場合が考えられる。第一は]それはすべての面で現勢的である。その場合それは[それ以上に]待ち望まれる完全性や期待される状態をもつことのない完全な存在者である。これはその名が至高にして偉大である創造者や知性のようなものである。あるいは[第二の場合として]それはある面で現勢的、ある面で潜勢的であるものである。それが潜勢的である限りにおいて、それが潜勢態から現勢態へ出ていくとすると、その出現は[ふたつの仕方]で起こる。第一は]一挙に起こる[場合である]。その場合それ[出現]は水が蒸気に変化するような存在様態であり、蒸気の形相は潜勢的に水に備わっており、その状態から一挙に現勢態に出現したのである。あるいは[第二の仕方として]段階的に起こる[場合]である。この場合それは運動となる。運動の本質は潜勢態から現勢態へ段階的な仕方でも出現することであることが明らかとなる。

この定義は前代の哲学者たちのものであり、第一の師匠はそれを批判して、段階的であることの観念は運動の観念に基づく時間の観念に基づいている、と言っている。このことは、段階的であることが、運動の量と定義される時間のなかに生起することであると定義されることから必然的なことである。かくして運動を段階的なものと定義することは循環論法的であり、それについてある後世の学者は段階的であることの観念が時間の観念やその支えに基づくことを避けることで、以下のように答えている。すなわち、段階的であることは直観的に表象されるものであり、その表象は時間のいかなるものにも基づいていないと、あるいはまた、それはすこしづつ生起することであると定義されるという。

(鎌田繁・東京大学東洋文化研究所)